

藤岡 惇著『アメリカ南部の変貌—地主制  
の構造変化と民衆—』

(1985年12月 青木書店)

宮 野 啓 二

(一)

本書は、著者が十数年来精力的に取り組んできたアメリカ南部のプランテーション制を、現在の「サンベルト」化と呼ばれる南部の変貌の中で捉え直そうとした野心的な労作である。著者の言葉を借りれば、『旧南部』秩序の大宗たるプランテーション奴隷制がその後どのような構造変化をとげたのか、これと関わって南部の地に生きる民衆の資質にどのような変化が生じ、彼らは南部の変貌にどのような役割をはたすようになったか(p. iii)を考察しようとしたものである。この文にみられるように、著者は単なる客観的な南部の農業史や土地制度史を書くだけでは足りず、歴史の創造主体たる民衆運動と客観的な歴史分析とを接合しようとする野心的な意図をもって本書を書いている。著者は本書の執筆にあたっての留意事項として、以下の三点をあげている(pp. iii~v)。

第一は、「第三世界と欧米=白人世界の接点」にあるアメリカ南部でも、社会の客観的な発展法則が独自の姿であれ貫徹していった様相を描くこと。

第二は、経済史=社会構成史研究の世界と民衆運動史研究の世界との「架橋」を試みたこと。

第三は、「敗北=挫折史観」をのりこえるような新しい民衆運動史の方法を構築しようと試みたことである。

ここにみられるように、著者は従来の経済史研究の方法にあき足らず、主体的な民衆運動を包みこんだ新しい経済史の方法を模索している。著者の既発表論文をみると、初めはプランテーションの経済構造の経済史的的分析に重点が置かれているが、次第に南部

の民衆運動史や「サンベルト」化のような現代史又は現状分析に関心を向けているようにみえる。本書もまたこうした著者の関心の移動に対応して、歴史と現状を生々と結びつけるような歴史分析の書たらんとしている。著者が三度にわたって南部の実地調査を試みたのも、こうした著者の現状と民衆運動への強い関心の現れであろう。こうした著者の姿勢が、本書に独特のトーンを付与し、意欲的で生産的な著作たらしめている。

本書は、南北戦争から現在に至る南部のプランテーション制の変化（奴隷制プランテーション→小作制プランテーション→ネオ・プランテーションへの進化）を、一貫した方法で追究したわが国では初めての労作であろう。著者は丹念に数多くの資料や文献を渉猟し、それらを批判的に摂取しながら、独自の構想をたて大胆に南部の変貌の実態に迫ろうとしている。以下、その内容の概要から始めよう。

## (一)

本書は序章について、第1篇南北戦争後の再篇、第2篇プランテーションの構造変化、第3篇民衆運動の世界の3篇から構成されている。以下本書の構成に従って、その内容を要約しておこう。

序章は、著者の問題意識や研究姿勢をみる上で重要である。Ⅰ．アメリカ資本主義と南部問題において、南北戦争後も南部はアメリカの中で異常にたちおくれた後進地域（工業の未発達、モノカルチャー農業、個人所得の低位）であった上、貧しい黒人に対する人種差別主義の牙城でもあった。しかしながら、第二次大戦後「巨大な変化」が南部に生じたと著者は言う。いわゆる「サンベルト」化がそれである。またそれと共に、公民権運動が高揚し、人種関係でも変化がみられた。このように、著者は「サンベルト」化という一大変化が遅れた南部で進行したことに強い関心をよせている。

Ⅱ．研究史の回顧では、まずアメリカにおける最近の南部の研究史（伝統史学、黒人民衆史、計量経済史など）が論評され、論点として、南北戦争前後の南部社会（特にプランテーション制度）の連続面と断絶面との統一的把握及び貧困化論と人間発達論との統合による民衆史の方法の創造の必要性を指摘している。

次に日本の研究史の中で、著者が「画期的業績」と称讃するのは、故菊地謙一氏の『アメリカにおける前資本制遺制』（1955年）である（因みに本書は菊地氏に捧げられている）。菊地氏の功績は、アメリカ独占資本主義体制の一基盤となった南部地主階級の寡頭支配

の存在形態を科学的に分析したことであった。しかしと著者は付言する。彼は当時のマルクス主義理論の時代的限界のため、プランテーションの資本主義的進化の可能性を見失っていた。これに対しレーニンが、南部の半封建的な現物小作制を「矛盾を胎みつつ資本主義的に進化しつつある過渡的の制度」と認識していた点を、高く評価している。

第1篇南北戦争後の再編は二つの章から構成されている。第1篇は、南北戦争後の南部再建過程とプランテーションの再編及びその構造が論じられており、評者の最も関心あるところである。第2章奴隷より立ちあがりて（何故かこの章のみがこうした文学的表現となっている）からみよう。奴隷解放後の南部の黒人は、プランテーションの土地分配の要求や公有地の獲得をめざして闘ったが、結局挫折してしまった。黒人の大半は、土地に飢えた小作農にとどまったのである。著者は、戦前の南部の大土地所有制が戦後も存続したことを、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナの諸州について実証している。地主（プランター）による大土地所有制は解体されず、再編されただけであった。

次に小作制プランテーションへの再編過程が追跡される。戦後南部農業は、きびしい労働力不足に直面し、地主は黒人を賃金労働者として雇おうとしたが、監督による集団労働をきらったため、プランテーションを家族労働単位の小さな小作地に分割して働かせる小作制プランテーションに転換していった。小作農の形態には、クロッパー、シェアテナント、キャッシュテナントがあったが、クロッパーが最も地主への依存＝従属度が強く、収穫物の1/2の高い小作料を支払う貧しい小作農であった。

著者はこの小作制プランテーションの存続の条件として、(1)地主機能と商人機能の結合による小作農の緊縛、(2)経済外強制力の残存（私刑、州権力による強制的な黒人労働力の拘束）をあげている。再編されたプランテーションは、市場機構の力に加えて、こうした経済外強制力を用いて黒人をつなぎ止め、隷属させたのである。

次にプランター階級による政治的支配の復活、「上からの革命」が取り上げられる。プランター階級の支配の特質は、北部支配層との従属的同盟と南部の寄生的、特権的ブルジョワジーとの同盟、すなわち、「棉花と商(工)業の同盟」にあった。この「ブルボンの寡頭支配」を可能にしたのは、民衆間の人種的提携の挫折と人種差別主義の確立であった。

第三章では、小作制プランテーションの経済構造が分析される。まず南部プランテーション地帯で、地主＝小作関係が普及していた事実が1910年センサスで確認される。原始的農具と手労働に依存する零細小作農と地主との関係は、対等の契約関係ではなく、

恩恵と奉仕のような人格的従属関係がつきまとっていた。

プランテーション内の農地は、平均的には直営地（46%）、小作農場（54%）に分かれ、約10家族の小作農がそれを耕作していた。プランターと小作農関係の特徴として、(1)手労働と孤立分散的耕作、(2)プランターによる収獲物の買占め、(3)生産手段、生活手段の前貸、(4)労働の監督、(5)債務奴隷制をあげている。小作制プランテーションとは、こうした古い隷属的特質をもつ小作制と新しい賃労働によるホームファームが結合した過渡的制度であった。

補論において、著者はこの小作制プランテーションをいかに把握するかの手がかりとして、レーニンのロシアの雇役制度論をとりあげている。著者によれば、レーニンは、雇役制度を古い農奴制的傾向と新しい資本主義的傾向とが相互に制限、牽制しあいながら、からみあった「過渡的制度」と捉えていた。著者の小作制プランテーションの捉え方は、このレーニンの認識と方法に依拠していると言えよう。

第2篇プランテーションの構造変化では、ミシシッピ・デルタを中心として、小作制プランテーションの資本主義的進化が取りあげられている。第4章では、大恐慌とニューディールの南部政策を論じている。大恐慌は南部農業に未曾有の打撃を与え、ルーズベルト大統領は南部問題を「最重要の国家的課題」と宣言した。ニューディールの南部政策、特に棉花作付制限政策は、小作農の過剰化→追い立てと地主による経営合理化（機械化、賃労働化）を促進することとなった。かくて南部において「地主的土地清掃」が開始され、多数の小作農が追放されていった。

第5章は、1950年センサスを使って、ミシシッピ農業の資本主義的発展が考察される。農場の階層別による賃労働、労働手段、労働の生産性が検討され、大経営の成長と小経営の両極分解、零細農のプロレタリア化が明らかにされる。

第6章は、ミシシッピ州のプランテーションの統計的析出（1950年センサス）を行っている。ミシシッピ州では、プランテーション数約2万1千（農場数の8%）が農場面積の39%を占めていた。同州のプランテーションの平均的内部構成をみると、農場面積391エーカーの内、ホームファームが72%、小作農場が28%を占め、小作農は4.7戸であった。

第7章は、小作制プランテーションの変貌過程を考察している。1930年代にプランテーション内のホームファームが拡大し、小作地の縮小がみられた。その理由は、ホームファームの棉作への進出、トラクター導入による手労働の駆逐、賃労働（特に季節雇）の

激増によるものであった。1910～54年の長期で見ると、プランテーション内の小作地の比率は、54%→18%に激減しており、このことは、ホームファームを中心に産業資本が成長しつつあったことを示している。これまでのホームファーム＝飼料作物生産、小作地＝棉花生産というプランテーション内分業が変化し、ホームファームはトラクターを使用する主要棉作地となり、賃労働への転換が進行していった。産業資本による技術的進歩と労働の社会化の要求をシェア・クロッピング制はかなえることが出来ず、急激に衰退していった（クロップ農場数は1930年＝100→1950年＝63）。シェア・クロップ制内部にも変化が生じた。それは、新しい型のクロッパー（賃労働と結合した cropper-laborer）の出現、小作地へのトラクター導入による全体的耕作様式の採用、全生産手段のクロッパーへの供与として現れた。

かくて、1950年代から「プランテーションがプランテーションでなくなる最高の発展段階」である「ネオ・プランテーション」への移行が進行した。それは、クロッパーの賃労働への転換、摘取機や除草剤散布による機械制大農業への発展であった。

最後に著者は総括として、プランテーションの発展構造を要約している。「現実の〔?〕プランテーションの最大の特徴は」と著者は言う。「このような『小作』制と賃労働という相互に対立するものが、また古い隷属的特質と新しい資本主義的特質とが、多かれ少なかれ組み合わせられ、結びつけられていることである。すなわちプランテーションとは、いわば『小作』制にまといつた高率『地代』を強制する細分的土地関係および商人＝高利貸資本の糸と、ホームファームから伸びつつある産業資本の糸とを結びあわせた存在といえよう。」(p. 163, 傍点評者)

第二次大戦後、プランテーションの伝統的な構造が変化していった。小作制は急速に賃労働制に駆逐され、プランテーションは大量の賃労働の雇用と機械化を特徴とする資本主義的大農場（ネオ・プランテーション）に移行していった。このようにプランテーションは、「古い特質と新しい特質との間の内面的矛盾に規定された独特の生成・発展・消滅の過程をたどったのであって、その一側面だけを固定的に把握することは、必然的にプランテーションの不当な一面化につながるといってよい」(p. 165, 傍点評者)。

第3篇の民衆運動の世界は、以上の分析をふまえて、著者が熱い想いをよせている南部の民衆運動（黒人運動?）の動向を描いており、本書の中で最も生々しい部分である。著者は南部の民衆運動の高揚期として、(1)南北戦争・再建期（大土地所有の解体＝土地革命をめぐる闘争）、(2)1930年代の土地革命の時期、(3)1950～70年の公民権運動期をあげてい

る。

第8章の民衆運動の胎動では、ミズーリ州ブツヒル地域（1939年）の土地追い立てに対する黒人小作農の抵抗とテネシー州ファイエット郡（1960年）の小作制の崩壊（地主的土地清掃）と公民権運動の展開の様相が具体的に描かれている。

第9章公民権運動の展開と帰結は、著者の実地調査（サンフラワー郡）にもとずいて、プランター支配の根拠地ミシシッピ州のデルタ地域における資本主義的大農場の展開（三分制の形成）と公民運動の苦しい闘いを生々と描いている。そして結論として、著者は次のように述べている。

デルタ地域では、地主的土地清掃が進行し、資本主義的大農業が成立した。ここでは、プランテーション制は、プロシア型のユンカー制に近い型から、近代イギリスで支配的となった三分制へと変貌していった。こうした資本主義的進化こそが、第二次大戦後の人権保障運動とあいまって南部の公民権運動の展開を準備した最も奥深い背景であった。デルタ地域では、プランターの支配から自立しうる自由な小生産者層（特に黒人自作農）が少なかったため、土地改革＝農民的自立の経済的条件を欠き、公民権運動の展開を困難にした。しかしこうした不利な条件や抑圧にもかかわらず、黒人民衆はしぶとく居座り公民権を獲得していった。

（三）

以上の概要が示すように、本書はアメリカ南部の変貌をプランテーション制の変化を通じて解明しようとしたものである。これに加えて著者は、こうした変化に対応して民衆（黒人）の運動がいかに生成・発展していったかを追究している。著者が力を入れて書いたこの「民衆運動の世界」については、評者の能力を越える問題なので論評を差し控えたい。ただ一言だけ感想を述べると、著者の民衆（黒人）運動への熱い期待にも拘らず、著者の描き出した黒人の運動は、あまりに孤立した小規模で痛々しい抵抗の闘争であり、人種主義の中で少数民族が置かれた立場の重さを痛感させられた次第である。

本書の功績は、何よりも南北戦争後の南部の小作制プランテーションの内的構造を立ち入って分析し、その解体過程を実証的に分析したことにある。この点に関して、著者は菊地謙一氏の業績を乗り越えた地点に達しており、わが国のアメリカ南部経済史の研

究を前進させたことは疑いえない。しかし、取り組んだ課題の大きさもあって、いくつかの問題点をふくんでいるようにみえる。そこで、本書の第1, 2篇に限定して、問題点を提示することにする。

第一は、本書の分析視角又は方法に関する問題である。著者の分析方法は、レーニンの『発達』(特に雇役制度論)に依拠している。そこでは、資本主義の発展の客観的法則が、古い前近代的諸関係を破壊・解体させ、新しい資本＝賃労働関係に変えて行く歴史の必然性が明快に示されている。本書も、ひどく遅れた南部においてさえも、資本主義の発展の鉄的法則が貫徹し、小作制プランテーションが資本主義の大農場に転化していたことを実証しようとしている。

レーニンの言うように、アメリカ南部の現物小作制とロシアの雇役制度が同質のものかどうかの問題はさておくとして、ロシアにおいてもレーニンの『発達』が描いたようには、前近代的諸関係が破壊・解体されなかったことは、頑強に残存しつづけたミール共同体をみても明らかである。このように歴史的条件によっては、資本主義は必ずしも前近代的諸関係を完全には解体させず、むしろそれを温存・利用してきたのである(山田盛太郎氏の『分析』をみよ!)。最近の生産様式の接合論は、こうした資本主義と前近代的生産諸様式との癒着や接合の在り方を問題にしており、こうした癒着＝接合の具体的存在形態こそ、各国や各地域の資本主義に独自の特色を与え、その構造的特質を刻印するものである。

著者は一種の法則史観にとらわれて、小作制プランテーション→ネオ・プランテーションへの必然的発展による南部農業の資本主義的進化を主張しているが、果して全体として南部農業は、その前近代的諸関係を完全に払拭して、「イギリス型」の資本主義的農業に変貌したのであろうか。この問題について評者は今実証的に著者の見解に反論する資料をもたないが、次のJ.C.カブの南部工業化論は示唆的である(J.C. Cobb, *Industrialization and Southern Society*, 1877-1984, Lexington, 1984を参照)。

南部では第二次大戦による軍需工業の発展により急速な工業化が進んだが、期待されたほどの社会的、政治的、制度的な変化は生じなかった。南部の頑強な保守的、農業的伝統がこわれず、古い「プランテーション型の工業的発展」の道を辿った。南部の工業化は、南部の「おとなしい低賃金労働力」に依存しており、工場内にシェア・クロッパ制に似た「温情主義」<sup>パターナリズム</sup>がもち込まれた(労働組合運動も発展せず)。このように、カブは「サンベルト」化の南部でも、南部独自の古い伝統が根強く残存し、南部の工業化は

その枠内での北部と異った特色をおびたものであったと主張している。

ネオ・プランテーションへの移行において、その賃労働はいかなる源泉から生じ、どのような質の賃労働であったのか。プランテーションから駆逐された黒人小作農は、どこに流れ、いかなる仕事に就業しえたのか。こうした問題を含めて、ネオ・プランテーションへの移行の独自の特質を究明して欲しかった。またネオ・プランテーションへ移行しえなかったプランテーションは、どのような形をとって残っているのか知りたところである。

第二は、南部のプランテーション制の変化を推進した原因は何かという大問題である。著者は、小作制プランテーションを古い隷属的特質＝小作制と新しい資本主義的特質＝賃労働制から成るとし、この相対立する両特質の「内在的矛盾」がプランテーションの変化の基本因であるように述べている（pp.163, 165）。もしそうだとすれば、この異質の両生産関係の矛盾がいかに具体的に発現し、いかなる階級対立が生じたのかを明らかにしなければならない。著者は古い特質をもつ小作制が、技術的進歩と労働の社会化を条件とする資本主義的關係と対立するという理論の抽象的レベルの対立に言及するのみで、この対立、矛盾の具体的内実を解明してはいない。

一体、南部のプランテーションは、それ自体の内在的矛盾により変化したのであろうか。著者はプランテーションの変化を強制したものとして、化学繊維の普及、カルフォルニアなどの機械制綿作の発展、労働力の流出対策、政府の作付制限政策などをあげている（pp.105, 107）が、こうしたいわば「外から」の圧力と内在的矛盾とはどう関連するのであろうか。何が基本因でプランテーションの変化が生じたのであろうか。

この問題と関連して、南部の黒人の大移動＝流出について述べておきたい。第一次大戦による北部の労働力不足により触発され、その後も北部の工業化によって大量の南部の黒人（主に小作農）が北に向かって流出していった（1900年の南部黒人の比率は90%であったが1970年には53%にまで激減）。この黒人に流出の“push”要因として、「地主的土地清掃」による排除があげられるが、それと共に黒人の貧困と差別主義の南部からの脱出→経済的向上への積極的な要求もあったといわれる（D. M. Johnson & R. R. Campbell, *Black Migration in America*, Durham, 1981 を参照）。こうした黒人の移動＝流出と南部プランテーションの変化とどのようにかわりあってきたかの問題も、著者に論じてもらいたかった。

第三は、プランテーションの生産様式の問題である。著者はプランテーションの生産様式の用語を使って、プランテーションについて興味ある独自の見解を示している（pp.

10～11, 50)。著者はプランテーション的生産様式を、世界資本主義の辺境・半辺境部（温帯の白人地帯を含む）で中枢部むけの農産物の大規模な生産のために組織され生産様式と捉え、その特徴として、(1)世界市場むけの利潤めあての大経営であること、(2)「無主地に囲まれた環境」(?) 下での大量労働力を確保する必要上、「何ほどの強制的な労働関係」を伴わざるをえなかったこと、をあげている。そして、この生産様式を封建制と並ぶ「隷属的生産様式」の二大亜型の一つと考えている。

この定義はあまりに一般的すぎて、プランテーションの特質（特に新大陸のプランテーションの特質）をとらえるには不十分である。著者が参考にしてしている E. T. トンプソンによれば、プランテーションは単なる経済制度であるにとどまらず、定住制度、政治制度であり文化制度でもあると言う。そして注目されるのはプランテーションが「権威」(authority) による支配を必要とし、その際「人種」が支配の核心にあった（労働関係＝人種関係）と述べていることである (E. T. Thompson, *Plantation Societies, Race Relations and the South*, Durham, 1975, pp. 32, 39, 95, 203-4, 217)。またベックフォードも、プランテーション社会が「人種に基礎をおくカースト制」であったことを強調している (G. L. Beckford, *Persistent Poverty: Underdevelopment in Plantation Economies of the Third World*, N. Y. 1922, pp. 9, 62-64, 70)。更に菊地謙一氏もプランテーションが、単なる経済制度、農業制度にとどまらず、より複雑な政治的、社会的制度であったことを認識していた（菊地『前掲書』, p. 28)。

このようにプランテーションは、単なる経済的関係に還元できない非合理的な「人種」による支配＝従属関係により維持されており、更にそれに加えて奴隷制下で育った「温情主義」<sup>パターナリズム</sup>が秩序を補強していた。プランテーションが存続するためには、こうした支配のイデオロギーが不可欠であった。そしてこのことは、プランテーションが近代の植民地支配の中で創出された制度であったことを物語っている。著者のように、プランテーションを広義の地主制と捉え、アセンダはともかく、ユンカー経営までもその中に含めるのは、プランテーション的生産様式の歴史的特質を見失わせることになるだろう。

以上、本書の基本的な問題点と思われる点について私見を述べたが、本書が南部史研究を前進させた意欲的な力作であることを変えるものではない。そして目下準備中の次の著作において、アメリカ資本主義の中での南部の変化を全構造的に分析し、「サンベルト」化の歴史的意味を明らかにしてくれるのを期待する。